

防災の日に考える「生き抜く力」学びたい

東京新聞社説 2022年9月1日 配信

今春から「地理総合」が高校生の必修科目となりました。さかのぼること半世紀前、世界史や日本史との選択制となり、学ぶ生徒もめっきり減った地理に今、光が当たっています。

長いブランクの弊害で、教え手側の人材不足を懸念する声も少なくありませんでしたが、日本地理学会の井田仁康・地理教育専門委員長によれば、おおむね順調に学習が始まっているようです。

いまなぜ地理か。背景に、従来では考えられなかったような災害の多発化、激甚化があります。この時代を生き抜くため、防災・減災の学びが必須になったのです。

大学入試センターは、2025年から大学入学共通テストに加わる地理総合のサンプル問題を公表しています。

その第二問は、明治期と昭和初期に津波に襲われた海沿いの街に関する出題です。東北・三陸地方を思わせる地図と次の文章を読み解き、(1)(2)(3)の記述が正しいか否かを考えさせる問題です。

「この集落では、明治29年の津波で被害を受けた後、防波堤を築くだけでなく、(1)集落を標高の高い場所へと移動させたことで、昭和8年の津波では被害を受けなかった。高台移転は、津波対策として(2)東日本大震災で津波の被害を受けた地域の復興でも実施されている。津波の被害から逃れられるメリットがある一方で、(3)職住分離がすすんで漁業従事者の負担が増加するなどのデメリットがある」(一部省略)

◆その先を考える授業に

鈴木康弘・名古屋大教授(災害地理学)の助言も得て、考察してみます。地図からは、明治期までは海の近くに家屋が密集し、職住近接だったことがうかがえます。明治期の津波で集落は流され住民は防波堤を築き、標高3~6mの高台に移転。しかし、昭和初期に再び津波に襲われ、標高20m近くで集落を復興しています。

鈴木教授は「日ごろから社会現象に関心を持ち、自分で考える習慣がなければ正解を導けない」とこの設問を高く評価します。地理の授業のあるべき姿が浮かんでくるということです。例えば、こんなことに考えを巡らせるのです。

明治期までなぜこれほど無防備な集落だったのか。過去の津波は伝承されなかったのか。高台に集落を移し、港町の暮らしは利便性や防災などの面から、どう変わったか。高さ40m近い斜面に駆け上がった東日本大震災級の巨大津波でも、集落は安全なのか…。

用語や等高線の読み取り方、地理情報システム(GIS)の活用法などを覚えるだけでなく、それらを踏まえて、一人一人が多面的かつ俯瞰(ふかん)的に課題を探求することを期待されているのです。

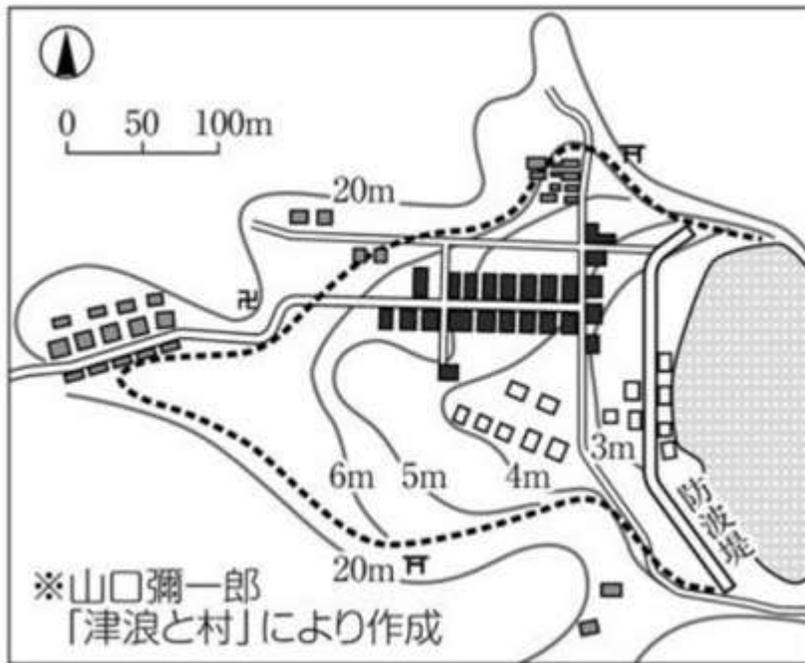
◆災害伝承碑を後世まで

瀬戸内海に面した広島県坂町では、2018年7月の豪雨で20人が亡くなりました。残念なことに町の避難勧告に従った住民はわずかでした。被害が集中した地域では、実は、明治期の豪雨でも土石流で多くの犠牲者を出していました。その事実を伝える石碑も地元に残されていましたが、ほとんど知られていませんでした。

こうした教訓を踏まえ、国土地理院は2019年、石碑や供養塔の所在地を示す地図記号「自然災害伝承碑」を新設しました。伊勢湾台風の犠牲者を悼む母子像(名古屋市港区)や大正期の東京を襲った高潮被害の供養塔(江東区)など全国各地の1498基が登録され、地理院地図などで地域の伝承を知ることができます。

過去に学ぶことは防災の基本ではあります。しかし、想定外のことが起き得るのもまた自然災害の怖さです。命を守るために心掛けたいのは、自らが置かれた状況や実情に合わせ、得られた情報を整理して、最善の策を見つけ出していくことです。つまりは地理総合に見込まれている学習のあり方にほかなりません。本でも、文化センターなどの講座、大学でも、高校生はもちろん、社会人の学びにも終着点はないと思います。

最後にサンプル問題の解答を。(2)(3)は正しく、(1)は誤りです。



---- 昭和8年の津波到達線
 — 等高線 — 道路
 ■ 海域
 □ 明治29年当時の家屋
 ■ 明治29年津波後～昭和8年の家屋
 ■ 昭和8年以降の家屋
 (大学入試センターが公表した共通テストのサンプル問題から)

9月1日付け東京新聞社説の添付図面

前ページの社説に関連して、幾つか疑問を生じたのでネット検索と共に過去の資料を見直してみることとした。

★ 山口彌一郎著『津波と村』とは？

★ 上の図はどこの地域をモデルにしているのか？

書名	津浪と村	
シリーズ名		
著者	山口彌一郎著 石井正己・川島秀一編	
本体価格	1800円	
ISBN9784-8382-	3211-6	
発行年月	平成23年6月	
判形・製本	46判・並製	
在庫情報	重版出来 在庫有	<p>「東北文化論」を考えぬ名著復刊！ 入手はなぜしも困難に思うところのゆえ 1933年の三陸大津波による集落移動を分析した地理学と民俗学の狭間に生きた著者60年に及ぶ研究成果を集約した名著の復刊。 1933年の三陸大津波による集落移動を分析した地理学と民俗学の狭間に生きた著者60年に及ぶ研究成果を集約した名著の復刊。</p>
<p>【目次】 なぜ『津浪と村』を復刊するのか（石井正己） 本書関連略図／新旧行政区対照表 津浪と村 序に代えて……三陸の旅 第一篇 津浪と村の調査記録 一 牡鹿の表と裏／二 十五浜の被害と移動／三 只越の宿／四 防災の高田の松原／五 気仙黒崎半島の村々／六 綾里の復興／七 移動の失敗と成功／八 津浪の話／九 唐丹村の災害と復興／十 綾里より小白浜へ／十一 小白浜よりさらに宮古へ／十二 両石の漁村の生活／十三 吉里吉里の理想郷／十四 激災地田老／十五 再び宮古より小本へ／十六 種市海岸／十七 三沢の川目聚落と津浪／十八 尻屋の津浪の話 第二篇 村々の復興 一 移動様式（一）集団移動・（二）分散移動・（三）原地復興／二 湾形と村の位置／三 村の生業と移動／四 村の移動の地域的特性 第三篇 家の再興 一 明治二十九年の両石の家系／二 船越村の家系再興／三 家系の再興事情と人口移動／四 重茂の復興と家系／五 昭和八年の姉吉の家系／六 再興の若干の問題 新聞への寄稿 津波で移る村の話／チリ地震津波の特性と防災／三陸津波とは？／津波防災の村をたずねて／津波災害対策論 出典情報 山口彌一郎の三陸津波研究（川島秀一） 著者略歴・編者略歴</p>		

出典：<https://www.miyashoten.co.jp/main/003/3-11/tunamitomurai.htm>

『津浪と村』—なぜ人は原地に戻るのか

江尻浩二郎（演出家）2019年3月11日

震災後間もない2011年6月、津波被災地の内発的な復興を考えるヒントとして、或る学者の書が復刊された。山口弥一郎著『津浪と村』である。山口は田中館秀三に地理学を、柳田国男に民俗学を学び、98年の生涯を学問に捧げた巨人だ。

山口は明治35年（1902年）、福島県大沼郡新鶴村（現会津美里町）に生まれ。24歳、福島県立磐城高等女学校で教壇に立つと、常磐炭田の炭鉱集落の調査を開始。中国、韓国、沖縄、台湾へと研究範囲を広げ、やがてその土地に受け継がれて来た生活、風俗、習慣に関心を持つようになると、民俗学的なアプローチも貪欲に取り入れた。炭鉱民俗誌に発表した論文が柳田国男の目に留まる。

昭和8年（1933年）、昭和三陸地震による大津波が発生。山口は昭和10年（1935年）冬から三陸沿岸の集落を歩き始める。明治29年（1896年）の明治三陸地震による大津波と合わせ、被害と復興の状況をつぶさに見聞した。この調査は昭和17年（1942年）夏まで断続的に行われ、驚くべきことに宮城県の牡鹿半島から青森県の八戸までを踏破。実に詳細な聞き取りを実施しており、その業績は他の追随を許さない。

山口の研究は「なぜ一旦移転した集落が原地（元の場所）に戻ってしまうのか」というテーマに行き着く。集団移転せず分散移転ではやがて戻る。移住者が原地域に住みつき活況を呈してくるとやはり戻る。そればかりではない。ひとたび豊漁に沸けば、それだけでも人々は原地に戻ってしまう。主因は経済的問題として語られるが、果たしてそれのみであろうかと山口は考えた。

「元屋敷とか、氏神とか、海に対するなどの民俗学的問題でも含んでいるとすれば、これは到底津浪直後の官庁の報告書にのみゆだねておくわけにはいかない。」（山口弥一郎著『津浪と村』序に代えて）

「村が大地に住みつく根強さを思い知らされる思いであった。唐丹村本郷など墓地は勿論、村の氏神・屋敷神・路傍の石仏まで皆移転させても、老婆は古屋敷に立寄って思いにふけていた。」（山口弥一郎著『東北地方研究の意味』）

『津浪と村』には、磐城での民俗学の友、和田文夫による調査報告「両石の漁村の生活」が挿入されている。この部分は全く一般的な民俗誌の記述であり、前後のテキストからは乖離しているものの、山口の問題意識を示す、最も重要な部分であろう。なぜ人は原地に戻るのか、その問いに最も遠くから答えようとする一つの試みである。

山口の調査でもう一つ興味深いのは、第三篇「家の再興」だ。家族全員が流されても、集落はその家を断絶させない。その行為の実態に迫る章である。

家を継ぐ中心となる人物は、その多くが何がしかの縁故者であるが、全くの他人が継ぐこともある。土地や屋敷の相続、義援金の獲得権や漁業権など、経済的な問題も大いにあるとしているが、山口はいわゆる祖霊信仰との関連性を指摘している。

石井正己編『震災と語り』には、川島秀一による或る女性の聞き書きが掲載されている。彼女は、昭和8年の津波で自分以外の家族全員が流された。

「三年生だから、四年生さ上がる三月の三日だから、花露辺（けろべ）さ用あって、夕方、泊まりさ行ってす、そして、こっ（唐丹本郷）から花露辺でも、子どもだからすぐ帰ってきられねからす、泊まって、その晩、流れたの。全部流れて、オレばり残ったの。ホトケマブリに置かれたわけだ。」（石井正己編『震災と語り』講演「津浪と伝承」川島秀一）

ホトケマブリとは供養のことだ。

そもそも本来の仏教には祖霊崇拜がない。しかしこの列島に広がるにはどうしてもそれを取り込む必要があった。この祖霊に対する執念、家に対する執念、村というものに対する執念は、現在の問題としても十分考察に値する。

長寿を保った山口は平成12年(2000年)、98歳で亡くなった。死後寄贈された資料の中に、阪神・淡路大震災の新聞記事を貼り付けたスクラップブックが残されている。傍らには以下の言葉が書き添えられてあった。

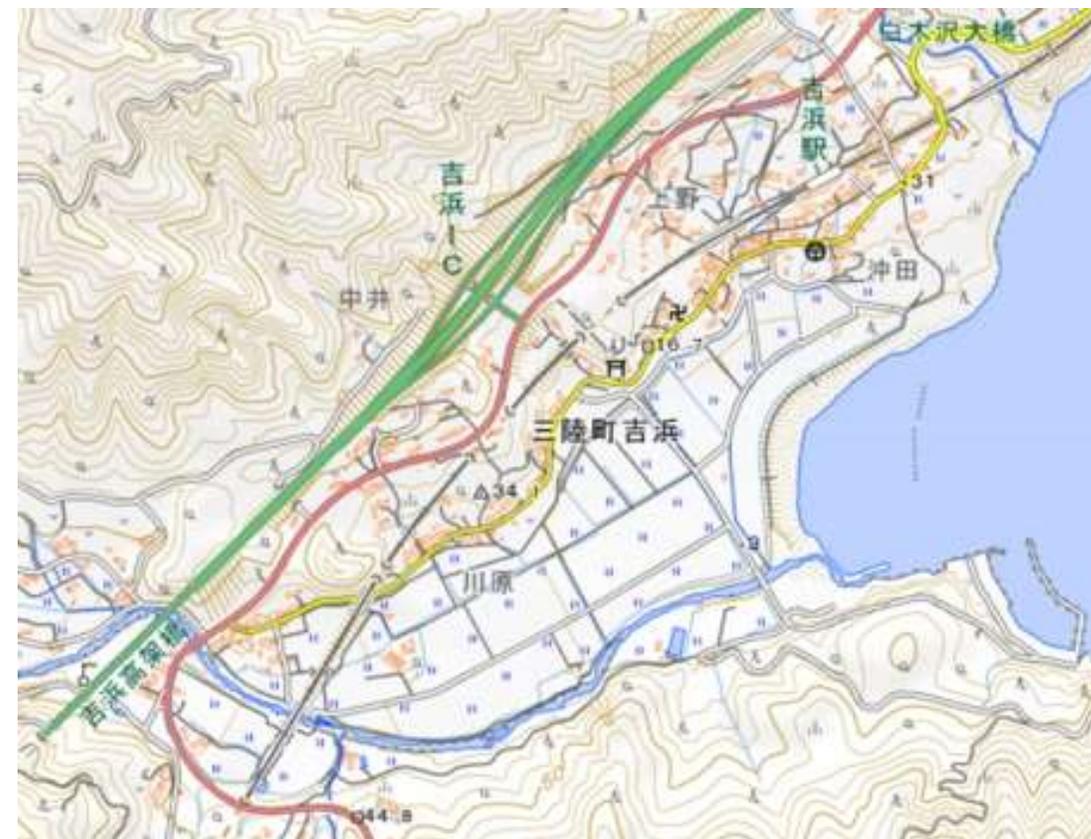
神戸海岸・横浜海岸には勿論原子力発電所はない。
然し日本の原子力発電所は海岸に分布し海底地震の真正面にある。
これは今までのリアス湾頭の災害と全く様態の異なる被害を及ぼすであろう。
そのメカニズムを研究した人は未だ世界中に見当たらない。

日本の海岸線には多くの原子力発電所がある。津波は、その記録を計算すれば、「常習」とされる三陸より、実は東海や南海のほうが頻度が高い。

放射能汚染という災害の中、人は自らを、家を、そして村を、どのように再興していくのだろうか。これはこれまで誰一人取り組んだことのないテーマであり、当然ではあるが、私たちは十分に資料を採集しておかなければならない。

[以下省略]

出典：<https://politas.jp/features/11/article/628>



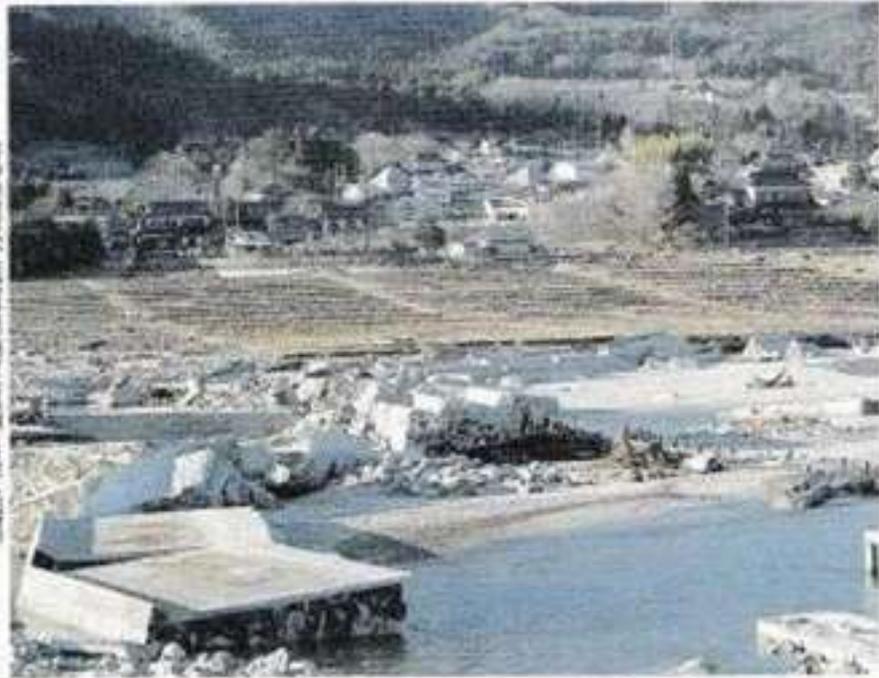
最新の国土地理院地形図(1/25,000)による

大船渡市三陸町吉浜

次ページの河北新報の記事のように、吉浜地区は明治の三陸津波で被災し、海辺の集落をまるごと高台移転したとのことで、社説の事例には該当しない。当地を訪ねてみると、『奇跡の集落』の碑が建てられていた。



津波先人の警鐘 生かされたか



津波で壊れた大船渡市の三陸町吉浜。津波の被害は甚大で、多くの建物が倒壊した。写真：NHK



「明治三陸」で被害 高台に集団移住

大船渡市の三陸町吉浜。津波で壊れた大船渡市の三陸町吉浜。津波の被害は甚大で、多くの建物が倒壊した。写真：NHK

「大船渡市」の三陸町吉浜。津波で壊れた大船渡市の三陸町吉浜。津波の被害は甚大で、多くの建物が倒壊した。写真：NHK

「大船渡市」の三陸町吉浜。津波で壊れた大船渡市の三陸町吉浜。津波の被害は甚大で、多くの建物が倒壊した。写真：NHK

「大船渡市」の三陸町吉浜。津波で壊れた大船渡市の三陸町吉浜。津波の被害は甚大で、多くの建物が倒壊した。写真：NHK

大船渡・吉浜湾

大船渡市三陸町 吉浜 奇跡の集落



「大船渡市」の三陸町吉浜。津波で壊れた大船渡市の三陸町吉浜。津波の被害は甚大で、多くの建物が倒壊した。写真：NHK

「大船渡市」の三陸町吉浜。津波で壊れた大船渡市の三陸町吉浜。津波の被害は甚大で、多くの建物が倒壊した。写真：NHK

「大船渡市」の三陸町吉浜。津波で壊れた大船渡市の三陸町吉浜。津波の被害は甚大で、多くの建物が倒壊した。写真：NHK

「大船渡市」の三陸町吉浜。津波で壊れた大船渡市の三陸町吉浜。津波の被害は甚大で、多くの建物が倒壊した。写真：NHK



最新の国土地理院地形図(1/25,000)による



原口・岩松：東日本大震災津波詳細地図
上巻，古今書院，2011.10. より引用



岩手日報企画「被災地を歩く」，2011.12.31. より引用

釜石市唐丹町小白浜

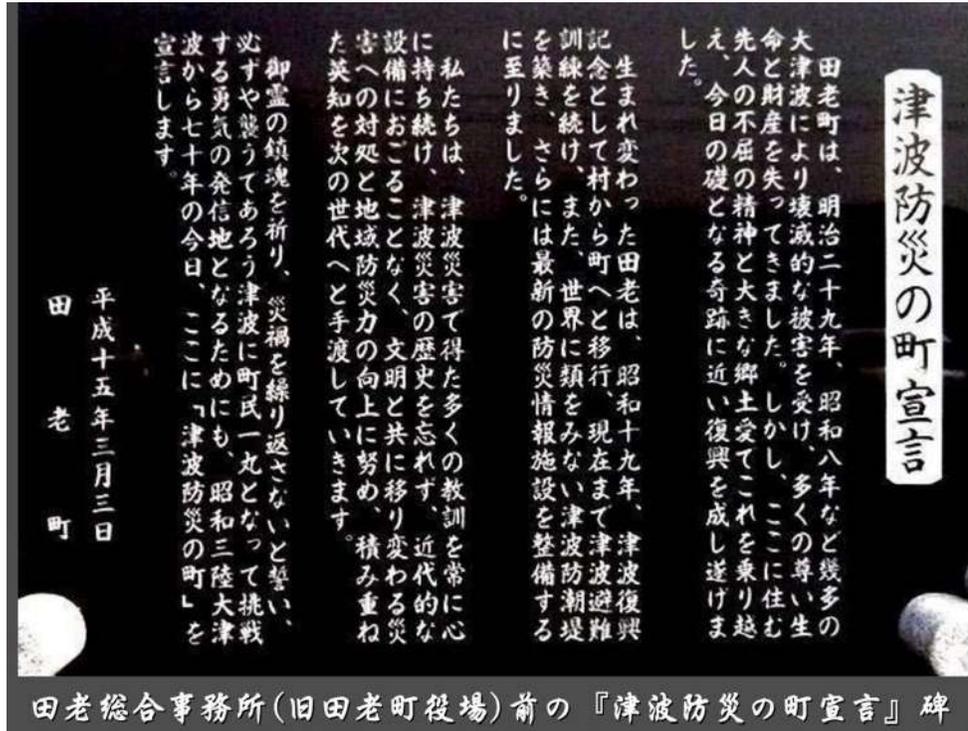
恐らく明治の三陸津波や昭和の三陸津波でも津波被害を受けていたに違いない。1960年のチリ津波の際にも大きな津波被害を受け、道路を兼ねた防潮堤を建設した。2011年の東日本大震災の津波では、その防潮堤が破壊され、内側の漁村集落はまたもや壊滅してしまった。左上の現在の地形図によれば、集落は標高20m以上の高台に移され、低地部にあった集落はなくなっている。この場合も社説の事例には該当しない。



最新の国土地理院地形図(1/25,000)による

宮古市田老町

『津波防災の町宣言』をした田老町から学ぶ点が多い。恐らく社説の事例が参考にしたのは、この田老町であろうと推察される。しかしながら、田老町には逆に、昭和の三陸津波の後、防潮堤の建設に邁進し、1960年チリ津波を克服できたとの自負が大きかったのであろうが、この防潮堤は2011年東日本大震災の津波には耐えることができず、またもや甚大な被害を出してしまった。この教訓をどのように今後の地震津波防災に生かすかが今、問われている。



田老漁港に残る津波到達標(3.11津波17.3m, 明治三陸津波15m, 昭和三陸津波10m)